これを前提に，以降の分析は，実際よりもやや公立寄りの結果になっているという認識で行われる．

注４）一体化の経緯：幼保一体化の経緯に着目し，各施設を以下の４類型に分類した．（１）同時型：幼稚園と保育所が同時に開設したもの．（２）合流型：それまであった保育所と幼稚園が合併したもの．（３）幼稚園先行型：もともとあった幼稚園に保育所機能を付加したもの．（４）保育所先行型：もともとあった保育所に幼稚園機能を付加したもの

注５）運営形態：幼保一体型施設の運営形態を，幼稚園部門と保育所部門の関係に着目して，以下の３類型に分類した．この運営形態の如何は幼保の一体化のあり方を強く方向付ける要素である．（１）移行型：０～２歳は保育所，３歳または４歳からは全員を幼稚園で処遇する．（２）並存型：０～２歳は全員が保育所で，３歳または４歳からは保育所と幼稚園が並存して園児を処遇する．なお，並存型のうち，幼保の同年齢児を同じクラスで処遇する事例を［混合型］，幼保の同年齢児のクラスが別である事例を［非混合型］とした．

注６）建築形態：各施設の建築形態について，文部科学省による分類を参考に，以下の３類型に分類した．（１）合築型：ひとつの建物で幼稚園と保育所が諸施設を共用しながら運営されている施設．（２）併設型：幼稚園と保育所の建物は別々だが，一続きの敷地内にあり園庭やホール等の施設を相互に利用できる施設．（３）隣接型：幼稚園と保育所が隣接しているが敷地が一続きでなく道路等で分かれている施設

注７）例えば，各クラス室が平屋分棟形式の場合などは，［合築］か［併設］かはこどもたちの活動実態や使い勝手に大差なく，このように分類したときの建築形態は幼保相互の関係性には必ずしも直結しない．

注８）2005 年では１年間の開設件数が 35 事例と最大で，その後 2006 年には 11 事例／年と減少している．2005 年は一体型施設の法整備の先駆けとして，実験的に総合施設の設置認可がなされた関係もあって設置数が多かったが，認定こども園法の制定（2006 年 10 月）後，認定こども園の開設に必要な自治体の条例策定が間に合わなかった事例もあるため，こうした動向となったと説明できる．

注９）この図の中で「混合保育可能な時間帯のすべて」と，「コアタイムのすべて」において混合保育を行っている園で，かつ３～５歳児に保育所児と幼稚園児が並存している事例を，［混合］型と定義している．

注 10）これに該当するのは，運営形態の定義（注４，８）より，［移行］と［非混合］のみ．

注 11）注４，８より，「コアタイムのすべて」以下の混合保育実施パターンには［移行］［非混合］のみが該当する．

注 12）事例数は少ないが，表２①～⑤の「平均以上と以下（運営形態は［移行］と［混合・非混合］）」の組み合わせによる４分割表カイ二乗統計量をもとにクラメールの連関計数値 C を求め，傾向を把握した．基準は C=01.0-0.8：［非常に強く関連］，C<0.8：［やや強く関連］，C<0.5：［やや弱く関連］，C<0.25：［関連していない（非常に弱く関連）］．

注 13）年齢別最大クラス数が多いほど施設全体の総クラス数も多い（相関係数 0.852）．

注 14）表３内のセル数を数え上げている．但し，Si 園の夕方保育①→②の「３４５延長室」のように活動場所と園児の混合の様子に変化がない場合を除いた．

注 15）衛生上の配慮などにより，０歳児室を延長保育室としている事例は少ない．

**参考文献**


1）山田あすか，樋沼綾子，上野　淳：幼保一体型施設の現況に関する報告及び考察，日本建築学会技術報告集　第 24 号，pp.307-312，2006 年 12 月

2）山田あすか，佐藤栄治，他：自治体と旗艦施設へのヒアリング調査による幼保一体型施設の運営実態に関する報告，技術報告集　第 25 号，pp.231-236，2007 年６月

3）矢野文子，中山徹，丸井寧子：幼保総合施設に関する研究その１／その２，日本建築学会大会梗概集 E-1 分冊，pp.469-472，2005.09

4）大谷由紀子，中山徹，丸井寧子：幼保総合施設における施設の運営と園児の生活に関する調査研究　幼保総合施設に関する研究その 3，2006.09，E-1 分冊，pp.103-104

5）小林千穂子，渡部昇治，石川允：幼稚園・保育所施設の一元的運営の可能性と課題，日本建築学会大会梗概集 F-1 分冊，pp.415-416，1998. 09

6）高橋秀行，佐藤将之，黒野弘靖：幼保一体施設における帰属の異なる園児の互いの居方に関する研究，日本建築学会大会梗概集 E-1 分冊，pp.179-181，2003.09

7）岩崎謙司，蟹江好弘：幼稚園と保育所の一体化に関する基礎的研究　群馬県桐生市を対象として，日本建築学会大会梗概集 E-2 分冊，pp.679-681，2004.08

8）岩田俊二，幼保一体化施設の運営状況　千代田区，掛川市，東員町の事例，2006.09，E-2 分冊，pp.477-478

9）大阪保育研究所編：「幼保一元化」と認定こども園，かもがわ出版，2006.09

10）東京都千代田区立いずみこども園，幼保一元化 いずみこども園３年間の実践，明治図書，2006

11）小宮山潔子，幼稚園・保育所・総合施設はこれからどうなるのか，チャイルド本社，2005

12）中山徹，杉山隆一，保育財政研究会編著：幼保一元化 - 現状と課題 -，自治体研究社 2004.05

13）「遊育」編集部，認定こども園に関する記事，雑誌『遊育』，pp.7-9，2006.10.09

14）文部科学省・厚生労働省幼保連携推進室 website http://www.youho.org

## 資料）アンケート票（2006）

# 幼保一体型施設に関するアンケート

＊幼保一体型施設とは，自治体の基準や独自の運営の工夫などによって幼稚園と保育園が連携して運営している園，幼保一元化施設，認定こども園，を指します。

貴園の名称

ご回答者様氏名
（役職名）

### 1. 施設概要・建物概要について　（以下の質問に該当する資料がある場合は，資料を同封していただけますと幸いです）

**1-1 いつ開設・認可されましたか**

保育園部門：　昭和・平成・西暦 ＿＿＿ 年 ＿＿ 月 ＿＿ 日
幼稚園部門：　昭和・平成・西暦 ＿＿＿ 年 ＿＿ 月 ＿＿ 日
一体化の開始年：昭和・平成・西暦 ＿＿＿ 年 ＿＿ 月 ＿＿ 日

**1-2 敷地面積　1-3 延床面積　1-4 園庭面積**

保育園部門：＿＿＿㎡　＿＿＿㎡　＿＿＿㎡
幼稚園部門：＿＿＿㎡　＿＿＿㎡　＿＿＿㎡
幼保一緒で：＿＿＿㎡　＿＿＿㎡　＿＿＿㎡

**1-5 貴園の建物形態に○を付けて下さい**

・保育園と幼稚園の園舎が・・
- ・同じ敷地にある
  - 同じ建物内
    - 同じ入り口 ―― A
    - 別々の入り口 ―― B
  - 別々の建物 ―― C
- ・別々の敷地にある ―― D
- ・幼保の区別はまったくなく１つまたは複数の建物を使っている ―― E
- ・その他（　　） ―― F

### 2. 運営状況について　（～歳児とあるところは，4月時点の満年齢としてお答え下さい）

**2-1 認可定員（人）を教えて下さい**

保育園部門：　0歳児 ＿＿ 人　1歳児 ＿＿ 人　2歳児 ＿＿ 人　3歳児 ＿＿ 人　4歳児 ＿＿ 人　5歳児 ＿＿ 人
幼稚園部門：　3歳未満児 ＿＿ 人　3歳児 ＿＿ 人　4歳児 ＿＿ 人　5歳児 ＿＿ 人
幼保の別なく：　0歳児 ＿＿ 人　1歳児 ＿＿ 人　2歳児 ＿＿ 人　3歳児 ＿＿ 人　4歳児 ＿＿ 人　5歳児 ＿＿ 人

**2-2 在園児数（人）を教えて下さい**

保育園部門：　0歳児 ＿＿ 人　1歳児 ＿＿ 人　2歳児 ＿＿ 人　3歳児 ＿＿ 人　4歳児 ＿＿ 人　5歳児 ＿＿ 人
幼稚園部門：　3歳未満児 ＿＿ 人　3歳児 ＿＿ 人　4歳児 ＿＿ 人　5歳児 ＿＿ 人

**2-3 運営時間を教えて下さい（保育時間帯の名称が異なるかもしれませんがご了承下さい）**

保育園部門：　早朝保育：＿時＿分 ～ ＿時＿分　基本保育：＿時＿分 ～ ＿時＿分　夕方保育：＿時＿分 ～ ＿時＿分
幼稚園部門：　早朝保育：＿時＿分 ～ ＿時＿分　基本保育：＿時＿分 ～ ＿時＿分　夕方保育：＿時＿分 ～ ＿時＿分
幼保の別なく：　早朝保育：＿時＿分 ～ ＿時＿分　基本保育：＿時＿分 ～ ＿時＿分　夕方保育：＿時＿分 ～ ＿時＿分

**2-4 早朝・夕方保育の利用人数を教えて下さい（月や日ごとに変わる場合は，平均的な人数をご記入下さい）**

| | 早朝保育 | 夕方保育 |
|---|---|---|
| 保育園部門： | 0歳児＿人，1歳児＿人，2歳児＿人，3歳児＿人，4歳児＿人，5歳児＿人 | 0歳児＿人，1歳児＿人，2歳児＿人，3歳児＿人，4歳児＿人，5歳児＿人 |
| 幼稚園部門： | 3歳未満児＿人，3歳児＿人，4歳児＿人，5歳児＿ | 3歳未満児＿人，3歳児＿人，4歳児＿人，5歳児＿人 |

**2-5 保育園部門・幼稚園部門で合同（混合）保育を行っている時間帯に○を付けて下さい**

・すべて一緒　・早朝保育　・基本保育（午前中）　・昼食　・基本保育（午後）　・夕方保育　・行事のとき　・その他 ＿＿＿＿

＊保育園部門と幼稚園部門が0～2歳，3～5歳で別れている場合，0～2歳児と3～5歳児の異年齢交流の機会についてお答え下さい．

**2-6 3～5歳児に保育園児と幼稚園児が在園している場合，保育園児と幼稚園児は行事以外でどれくらい一緒に遊びますか**

・該当しない　A. よく一緒に遊んでいる　B. まあまあ一緒に遊んでいる　C. あまり一緒には遊ばない　D. 一緒には遊ばない

**2-7 保育園部門と幼稚園部門が0～2歳，3～5歳で別れている場合，保育園児と幼稚園児は行事以外でどれくらい一緒に遊びますか**

・該当しない　A. よく一緒に遊んでいる　B. まあまあ一緒に遊んでいる　C. あまり一緒には遊ばない　D. 一緒には遊ばない

### 3. 幼保一体化について

**3-1 貴園が幼保一体化を始めた理由を教えて下さい（複数回答可）**

・幼稚園児の減少　・保育園児の減少　・保育所待機児童の解消
・預かり保育の導入　・施設の老朽化　・平等な発達環境の保障
・総園児数の確保による集団体験の保障　・運営費の削減，運営の効率化
・乳幼児期の一貫した教育・保育環境の確保
・その他 ＿＿＿＿

**3-2 貴園が幼保一体化を始めた経緯を教えて下さい**

・いままであった幼稚園と保育園が一緒に運営することになった
・いままであった幼稚園が保育園機能を付加して運営をすることになった
・いままであった保育園が幼稚園機能を付加して運営することになった
・まったく新しく幼保一体型施設を始めた

<経緯の詳細>

アンケートは以上です．ご協力ありがとうございました．差し支えなければ，アンケート票とともに，施設の平面や概要が分かる資料を添付下さい．
各質問項目の回答欄に書ききれないことや，幼保一体化に関するご意見・お考えなどがございましたら，併せて右面にご記入いただければ幸いです．

厚生労働科学研究費補助金（政策科学総合研究事業（政策科学推進研究事業））
分担研究報告書

# 活動場面展開の実態と園児のなじみの過程からみた幼保一体型施設の建築計画に関する研究

研究協力者：樋沼　綾子（首都大学東京大学院工学研究科建築学専攻　博士前期課程）
同　　：上野　淳　（　　同　　教授）
主任研究者：山田あすか（立命館大学理工学部建築都市デザイン学科　講師）
研究協力者：山田　恵美（立命館大学総合理工学研究機構　客員研究員）

本稿では，全国規模でのアンケート調査によって幼稚園と保育所が一体的に運営されている施設の現況を把握する．さらに，この分析の結果を踏まえ，運営状況が異なる５つの施設を選定して実地観察調査を行い，幼保一体型施設の実際の運営状況を示した．以上２つの調査結果より，幼稚園と保育所を一体的に運営するための課題と幼保一体型施設の特徴は，「短時間児と長時間児の混在」と「短期間児と長期間児の混在」によるものと指摘できた．そこで第４章と第５章では，園児の施設滞在時間と滞在期間の違いに着目して，一日の園児数変動による活動場面の展開を明らかにし，園児のなじみの過程について考察を行った．

## A．研究の背景と目的

### A．1　背景

従来，「３～５歳児のための学校教育施設」である幼稚園と，「保育に欠ける０～５歳児のための児童福祉施設」である保育所は，異なる目的・管轄で運営されてきた．近年，少子化や女性の社会進出，核家族化などの社会構造の変化，また就学前教育・保育の見直しなどの観点から，幼稚園と保育所を一体的に運営する幼保一体型施設が注目されている．2006年10月に認定こども園法が施行され，幼保一体型施設は今後更なる増加が見込まれる．

しかし，幼稚園と保育所が一体的に運営される多種多様な施設についての，運営形態などの整理は十分にされておらず，保護者にとっても，現行の幼稚園・保育所との違いなどがよくわからない状況であり，運営者もまだ模索段階のところが多いのが現状である．

### A．2　本稿の目的と構成

本研究では以下の４点より，幼保一体型施設計画上の知見を得ることを目的とする．

1）全国のアンケート調査［調査①］により，幼保一体型施設の運営様態等の詳細を把握し，全国の幼保一体型施設の概況を捉える．

2）調査①よって典型事例を５つ抽出し，クラス単位での終日観察調査［調査②］を行い，各施設の運営実態等を把握する．

3）以上２点より得られた知見をふまえて，全国の幼保一体型施設の典型事例に対するヒアリング調査［調査③］及び長時間児と短時間児の混合割合が異なる３園の４歳児クラスの終日観察調査［調査④］を行い，一日の園児数変動による活動展開を明らかにする．

4）調査④と同クラスの長時間児・短時間児２名ずつに対する半年間の終日個人追跡調査［調査⑤］により，４月から半年間における園児のなじみの過程を追跡し，その過程に空間構成がどのような影響を及ぼしているか検証する．

本稿は５つの調査に基づき６つの章で構成される（表1）．

## B．全国の幼保一体型施設の概況と施設類型

調査①より，幼保一体型施設を運営形態・建築形態・一体化の経緯に従って類型について考察した（表２）．

### B．１　運営形態

［混合］が約半数で，［移行］は全体の 18.3%である．この運営形態は，幼保一体型施設のあり方に大きく影響する．

### B．２　建築形態

［合築型］が約３/４を占める．これは幼稚園の空き教室利用と，新築の際合築型を選択する事例が多いためである．

### B．３　一体化の経緯

［合流］が約半数を占め，次に［幼稚園先行］が続く．これは，地方の過疎化に伴う乳幼児施設の統廃合や，都市部の保育所待機児童問題及び幼稚園の定員割れ等が影響している．

## C．幼保一体型施設の運営実態

### C．１　概要

調査②の対象施設（表３）のＴｏ園（並存型）とＹｕ園（移行型）での運営実態と幼保の交流様態を示す．更に，調査③のＫｓ園，Ｈｈ園を加えて一日の活動場所の展開について述べる．

### C．２　幼保一体型施設の一日

#### １）一日の流れと園児数の変化

Ｔｏ園，Ｙｕ園の一日の運営の流れを図１に示す．幼保一体型施設の一日は，大きく朝の延長保育，基本保育，夕方の延長保育の３つの時間帯で捉えられる．幼保一体型施設では，朝・夕の延長保育利用の有無によって園滞在時間が３つに類型化され，また園滞在期間は０～２歳児の保育園部門に入園する場合と，３～５歳児の幼稚園部門に入園する場合という２つに類型できる．このため，幼稚園利用児の登園と帰宅の時間に合わせて，３つの時間帯の変わり目で園児数が大きく変化する（図２）．

#### ２）延長保育の活動場所

上述のように延長保育と基本保育の時間帯では園児数が大きく異なることから，一般に時間帯ごとの活動場所を変えている．この活動場所の変化は，①０～２歳児と３～５歳児が朝のみ同室，②夕方の遅い時間のみ同室，③朝夕同室，の３類型に整理できる（図３）．延長保育の場所設定は利用人数によって適切なあり方が異なり，少人数の場合には０～５歳児が同じ場所に

**表１　調査概要と研究構成**

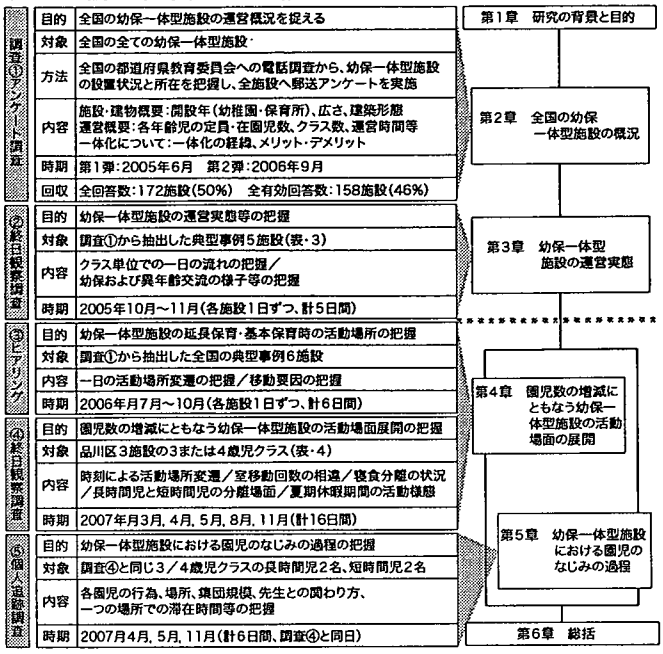



**表２　幼保一体型施設の類型**

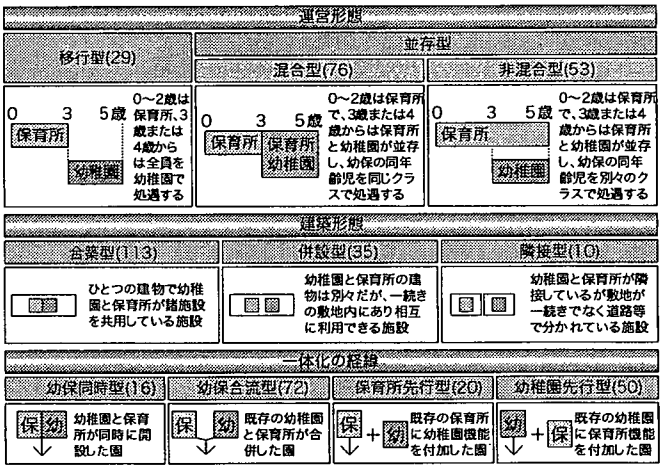



**表３　幼保一体型施設運営概要調査（観察調査施設概要）**

| 施設名 | Ｓｉ園 | | Ｔｏ園 | | Ｓｅ園 | | Ｆｕ園 | | Ｙｕ園 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 所在地 | 埼玉県飯能市 | | 埼玉県比企郡 | | 神奈川県箱根町 | | 東京都品川区 | | 神奈川県横浜市 | |
| 開設/認可* | H14 S55 H14 | | S33 S61 S61 | | S31 H15 H15 | | H14 S55 H14 | | H17 H17 H17 | |
| 敷地/延床面積 | 2,401㎡/1,268㎡ | | 5,940/1,076 | 1,272/630 | 3,158㎡/1,378㎡ | | 1,394㎡/1,142㎡ | | 2,433㎡/1,540㎡ | |
| 建築形態 | 併設型 | | 隣接型 | | 合築型 | | 合築型 | | 合築型 | |
| 運営形態 | 移行型 | | 並存型 | | 並存型 | | 移行型 | | 移行型 | |
| 導入経緯 | 幼稚園先行型 | | 保育所先行型 | | 幼保合流型 | | 幼稚園先行型 | | 幼保同時型 | |
| 園児数/定員 順に0-5歳児 | 8/6<br>12/12<br>12/12 | 33,39,49<br>/計240 | 5/12,12/12<br>16/12,22/24<br>35/30,25/30 | 12/30<br>19/30<br>23/30 | 5/3,5/6<br>13/11,15/19<br>18/23,19/23 | 12/19<br>12/23<br>13/23 | 6/6,9/10<br>12/12<br>15/15 | 68/60<br>64/64 | 10/10<br>19/20<br>29/30 | 64/60<br>50/60<br>0/0 |
| 運営時間（延長保育含） | 7:00-19:00 | 8:00-18:00 | 7:30-19:15 | 8:30-18:30 | 7:30-18:30 | 8:30-16:30 | 7:30-19:30 | 7:30-19:30 | 7:00-19:00 | 8:00-18:00 |
| 平面図 立地 | 1F 2F | | 1F | | 1F 2F | | 1F 2F | | 1F 2F | |
| 網かけは保育室 保育所 幼稚園 | 静かな戸建住宅地の中にあり周りには畑が広がる私立園 | | 幼稚園と保育所の間に小川が流れ豊かな自然に囲まれた村立園 | | 小学校と隣接し校庭を共有している山々に囲まれた町立園 | | 閑静な住宅地の中にあり中学校と隣接している区立園 | | 港北ニュータウンの東側に位置し住宅街の中にある私立園 | |

＊ 順に保育所，幼稚園，一体運営開始年を示す

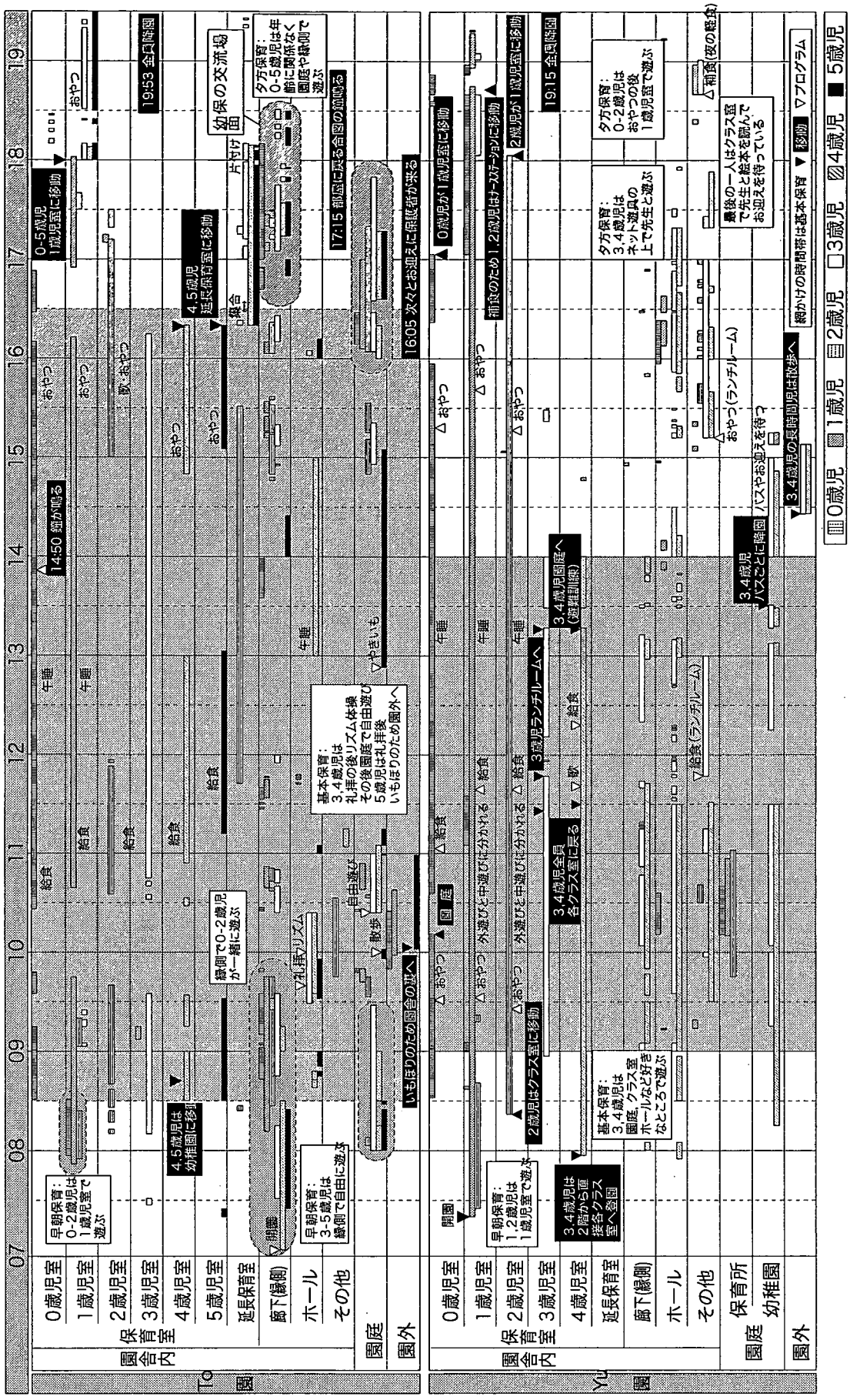



**図1　幼保一体型施設における集団編成と活動場所の時刻変化（To 園，Yu 園の事例）**

いることで異年齢交流の機会になり，また人数規模を確保できる．一方，大人数の場合は０～２歳児と３～５歳児で部屋を分ける方が安定した環境となる．調査施設の中で夕方の遅い時間に０～５歳児を同室に集約しているＴｏ園とＦｕ園では，園児数の減少に合わせて段階的に活動範囲を集約していくため，部屋の大きさと園児の規模が合致していて，家庭的で落ち着いた雰囲気を創出している．

### Ｃ．３　運営形態と幼保および異年齢の交流の様子

調査①より，運営形態により幼保の交流のあり方に相違があったため，Ｔｏ園（並存型）とＹｕ園（移行型）での幼保の交流の様子を比較する（図１）．図中，点線で囲われた部分が幼保の交流場面を示している．Ｔｏ園では３～５歳児に幼保の区別はなく，一緒に活動が展開していき，自由遊びの時間には異年齢交流も自然に起きる．一方移行型であるＹｕ園では，幼保の交流は見られなかった．移行型では並存型に比べて，幼保の別が年齢区分と一致するため，０～２歳児と３～５歳児の活動が分断され交流が生じにくい状況が起こりやすい．

### Ｃ．４　小括

幼稚園と保育所を一体的に運営するための課題と幼保一体型施設の特徴は，「短時間児と長時間児の混在」と「短期間児と長期間児の混在」によるものと指摘できる．

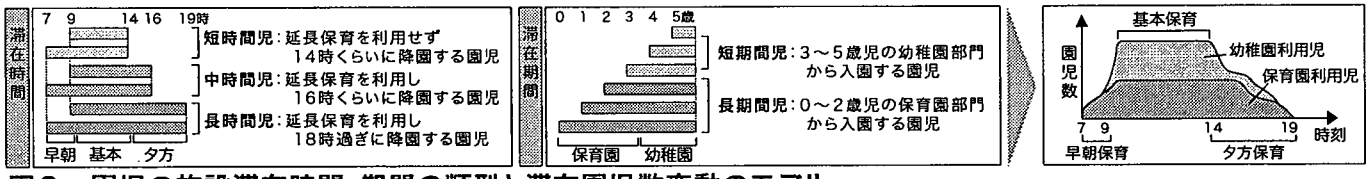



図２　園児の施設滞在時間・期間の類型と滞在園児数変動のモデル

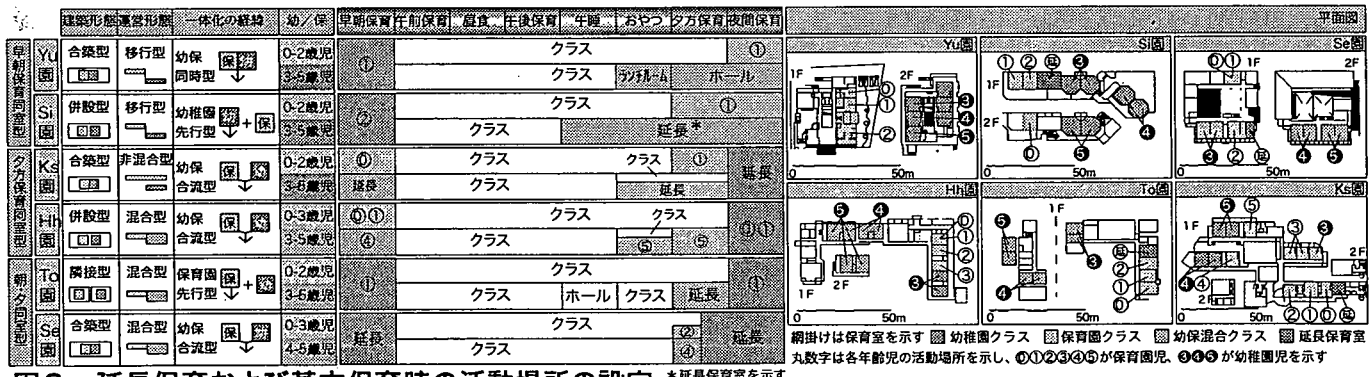



図３　延長保育および基本保育時の活動場所の設定　＊延長保育室を示す

## D.　園児数の増減にともなう幼保一体型施設の活動場面の展開

３章までに得た知見をふまえて，４章では園児の施設滞在時間の違いに着目して，園児数の増減による活動場面の展開を把握する．

### D．１　調査概要

調査対象施設を品川区のＰｕ園，Ｎｏ園，Ｆｕ園の３園とする．３園共通して，３または４歳から幼稚園部門へ移行する［移行型］の運営形態をとっているが，短時間児，中時間児，長時間児の割合が異なっている（図４・１－４・３）．

調査対象クラスは，４月に保育園から移行した幼稚園クラスを対象とする．

①Ｐｕ園：大多数が長時間児である３歳児クラス

**Ｐｕ園**

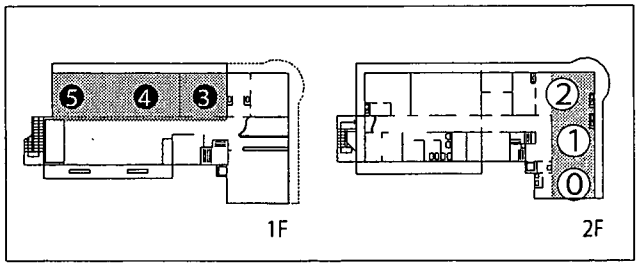
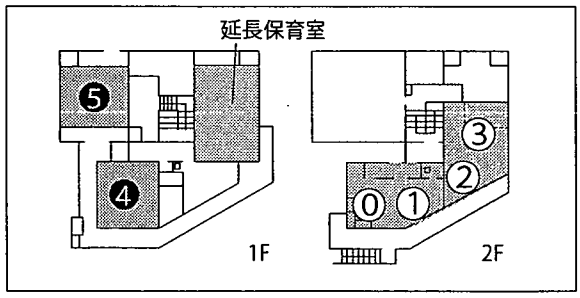
| | | |
|---|---|---|
| 施設概要 | 所在地 | 東京都品川区 |
| | 運営主体 | 品川区 |
| | 開設/認可 | 保育園：Ｈ１６，幼稚園：Ｓ１６，幼保一体型施設：Ｈ１６ |
| | 運営形態 | 移行型 |
| | 建築形態 | 合築型 |
| | 導入経緯 | 幼保同時型 |
| 運営概要 | 園児数/定員 | 保育園部門：０歳児：１２/１２，１歳児：１６/１６，２歳児：１８/１８，３歳児：１８/１８<br>幼稚園部門：４歳児：２３/２３，５歳児：２３/２３ |
| | クラス数（担任保育者数） | 保育園部門：０－１歳児：１クラス（３名），２－３歳児：１クラス（３名）<br>幼稚園部門：４歳児：２クラス（２名），５歳児：２クラス（２名） |
| | 運営時間（基本保育） | 保育園部門：７：３０－２０：３０<br>幼稚園部門：７：３０－２０：３０（９：００－１４：００） |
| 調査対象 | 対象クラス | ３歳児（１８名） |
| | 混合割合（滞在時間） | 長時間児：短時間児<br>１　：　０ |
| 建物概要 | 立地 | 品川区の住宅地にある．都心にあるため，敷地は狭小． |
| | 敷地／延床面積 | １，４４９㎡/９９９㎡ |
| | 平面図 |  |
| | 網かけは保育室<br>保育所<br>幼稚園 | |



図４・１　活動場面抽出調査：観察調査施設概要【Ｐｕ園】

②Ｎｏ園：短時間児，中時間児，長時間児がそれぞれ２：１：１の割合で混在する４歳児クラス

**Ｎｏ園**

| | | |
|---|---|---|
| 施設概要 | 所在地 | 東京都品川区 |
| | 運営主体 | 品川区 |
| | 開設/認可 | 保育園：Ｈ１８，幼稚園：Ｓ４８，幼保一体型施設：Ｈ１８ |
| | 運営形態 | 移行型 |
| | 建築形態 | 合築型 |
| | 導入経緯 | 幼稚園先行型 |
| 運営概要 | 園児数/定員 | 保育園部門：０歳児：6/6，１歳児：１０/１０，２歳児：１２/１２，３歳児：１５/１５<br>幼稚園部門：４歳児：３０/３４，５歳児：２４/３４ |
| | クラス数（担任保育者数） | 保育園部門：０－１歳児：１クラス（３名），２－３歳児：１クラス（３名）<br>幼稚園部門：４歳児：２クラス（２名），５歳児：２クラス（２名） |
| | 運営時間（基本保育） | 保育園部門：７：３０－１９：３０<br>幼稚園部門：７：３０－１９：３０（９：００－１４：００） |
| 調査対象 | 対象クラス | ４歳児（３３名） |
| | 混合割合（滞在時間） | 長時間児：中時間児：短時間児<br>１　：　１　：　２ |
| 建物概要 | 立地 | 品川区の住宅地にある．都心にあるため，敷地は狭小だが園庭のほかに裏庭がある． |
| | 敷地／延床面積 | １，７００㎡/７８５㎡ |
| | 平面図 |  |



網かけは保育室
▨ 保育所
▨ 幼稚園

図４・２　活動場面抽出調査：観察調査施設概要【Ｎｏ園】

③Ｆｕ園：短時間児と長時間児が３：１の割合で混在する４歳児クラス

**Ｆｕ園**

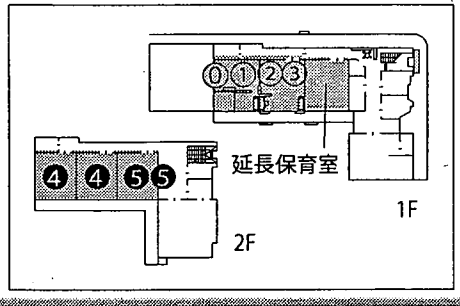
| | | |
|---|---|---|
| 施設概要 | 所在地 | 東京都品川区 |
| | 運営主体 | 品川区 |
| | 開設/認可 | 保育園：Ｈ１４，幼稚園：Ｓ５５，幼保一体型施設：Ｈ１４ |
| | 運営形態 | 移行型 |
| | 建築形態 | 合築型 |
| | 導入経緯 | 幼稚園先行型 |
| 運営概要 | 園児数/定員 | 保育園部門：０歳児：6/6，１歳児：１０/１０，２歳児：１２/１２，３歳児：１５/１５<br>幼稚園部門：４歳児：６０/６０，５歳児：６４/６４ |
| | クラス数<br>（担任保育者数） | 保育園部門：０－１歳児：１クラス（３名），２－３歳児：１クラス（３名）<br>幼稚園部門：４歳児：２クラス（２名），５歳児：２クラス（２名） |
| | 運営時間<br>（基本保育） | 保育園部門：７：３０－１９：３０（７：３０－１８：３０）<br>幼稚園部門：７：３０－１９：３０（９：００－１４：００） |
| 調査対象 | 対象クラス | ４歳児（２６名） |
| | 混合割合<br>（滞在時間） | 長時間児：短時間児<br>１　：　３ |
| 建物概要 | 立地 | 品川区の住宅地にある．都心にあるため，敷地は狭小． |
| | 敷地／延床面積 | １，３９４㎡/１，１４２㎡ |
| | 平面図 |  |
| | 網かけは保育室<br>保育所<br>幼稚園 | |

図４・３　活動場面抽出調査：観察調査施設概要【Ｆｕ園】

## D．２　一日の中でおこる園児数増減にともなう活動場面の展開

各園の一日の園児数増減の様子とそれにともなう活動場所の移動の様子および主要な活動場面を図４・４に示した．

それぞれ，短時間児，中時間児，長時間児の混合割合が異なるため，登園および降園の際の様子が異なり，また延長保育時の活動場所や移動様態が異なる．

①Ｐｕ園

大多数が長時間児のため，登園および降園の際の園児数変動はゆるやかなものとなっている．

登園時は，９時前後に断続的に園児が登園し，９時半には全員がそろう．

降園時は，数名の園児が１４時で降園するが，そのほかは１７時過ぎから徐々にお迎えの保護者が来て，１８時半以降に残っている園児は数名程度となり，２０時半に全員が降園する．

②Ｎｏ園

短時間児，中時間児，長時間児が混在しているため，降園の際の園児数変動が３段階となっている．

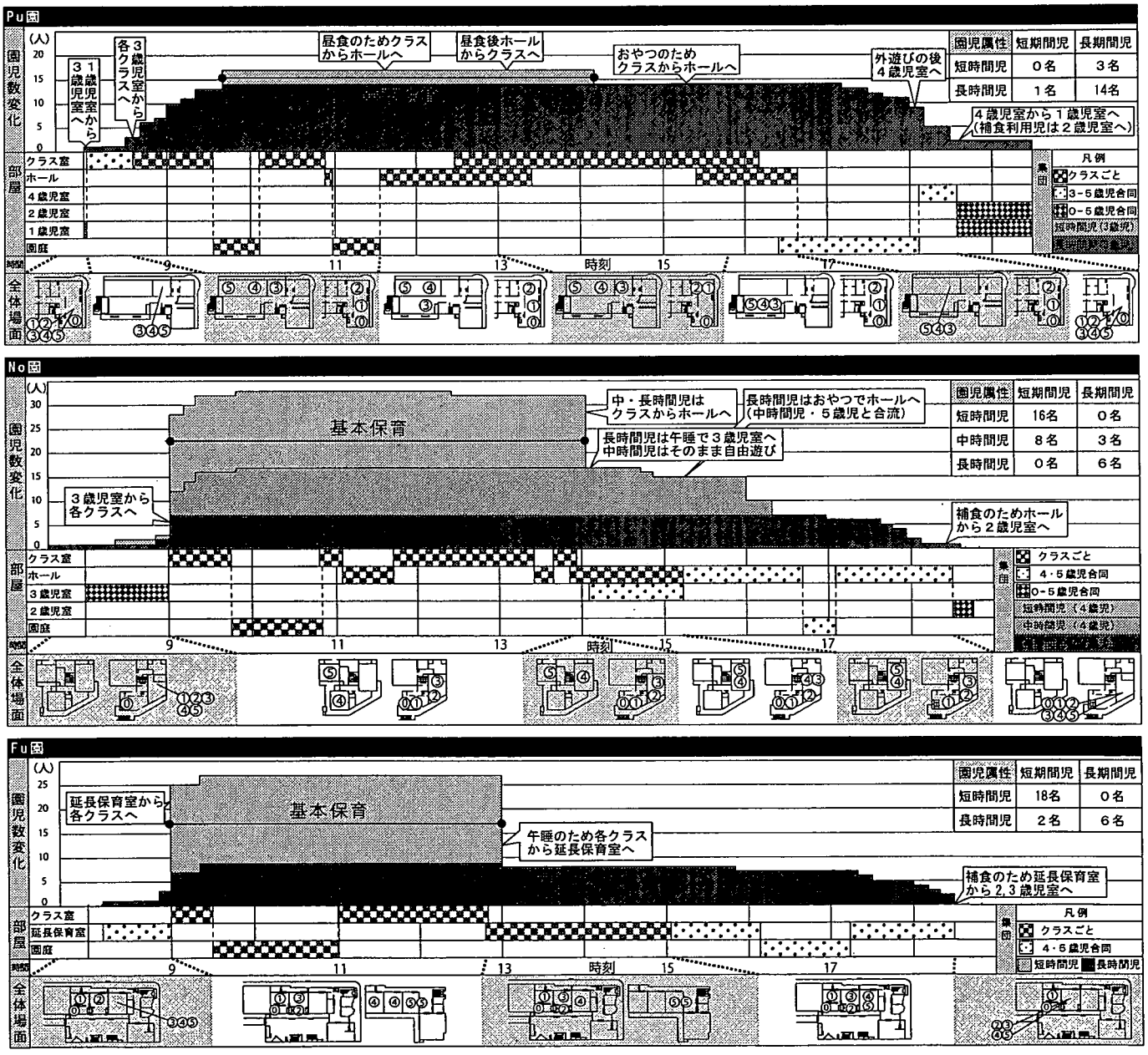



図４・４　一日の園児数変化と活動場所の変遷

朝は短時間児の登園時刻である９時に園児数が急増する．現在は早朝保育利用児は数名程度となっている．

降園は短時間児の降園時刻である１４時，また中時間児の降園時刻である１６時前後に園児数が急激に減少する．なお，１７時以降は断続的にお迎えの保護者が来園し，園児数がゆるやかに減少していく．１８時以降に残っている園児は０－５歳児全体で数名程度となり，１９時に全員が降園する．

③Ｆｕ園

短時間児と長時間児が混在しており，一般的な幼保一体型施設の園児数変動となっている．

朝は，短時間児の登園時刻である９時に園児数が急増する．調査時，早朝保育利用児は数名程度であった．

降園は，短時間児の降園時刻である１３時に園児数が急激に減少する．その後は１７時過ぎから断続的にお迎えの保護者が来園し，１８時半にはほとんどが降園し，遅くても１９時半には完全降園となる．

### Ｄ．２．１　活動場所変遷の典型的事例

#### １）活動場所変遷の様子

**・早朝保育→基本保育**

早朝保育時は園児数が少ないため，年齢や所属の異なる園児たちが集約されて保育を受けることが多い．

①Ｐｕ園

早朝保育時間帯内にも，園児数の増加にともなって，保育園児と幼稚園児を同室から別室に分けるため幼稚園児の移動が発生している．具体的には，７時半から８時までは０－５歳児が１歳児室で過ごし，８時になると幼稚園児である３－５歳児が３歳児室へ移動する．そして，８時半に４，５歳児は各クラスへ移動する．

②Ｎｏ園

１－５歳児が保育園部門である３歳児室で過ごす．早朝保育の利用人数が少ないため０－５歳児合同保育を行うことは，人数規模の保障や，異年齢交流の促進に対して有用である．

③Ｆｕ園

３－５歳児が延長保育室で一緒に過ごす．保育園部門である３歳児を幼稚園部門の４，５歳児と同室で保育することにより，翌年の幼稚園部門への移行をスムーズにさせる意図がある．

登園してきた園児の数が増えて基本保育の時間になると，各クラスへと活動場所の移動が起こる．

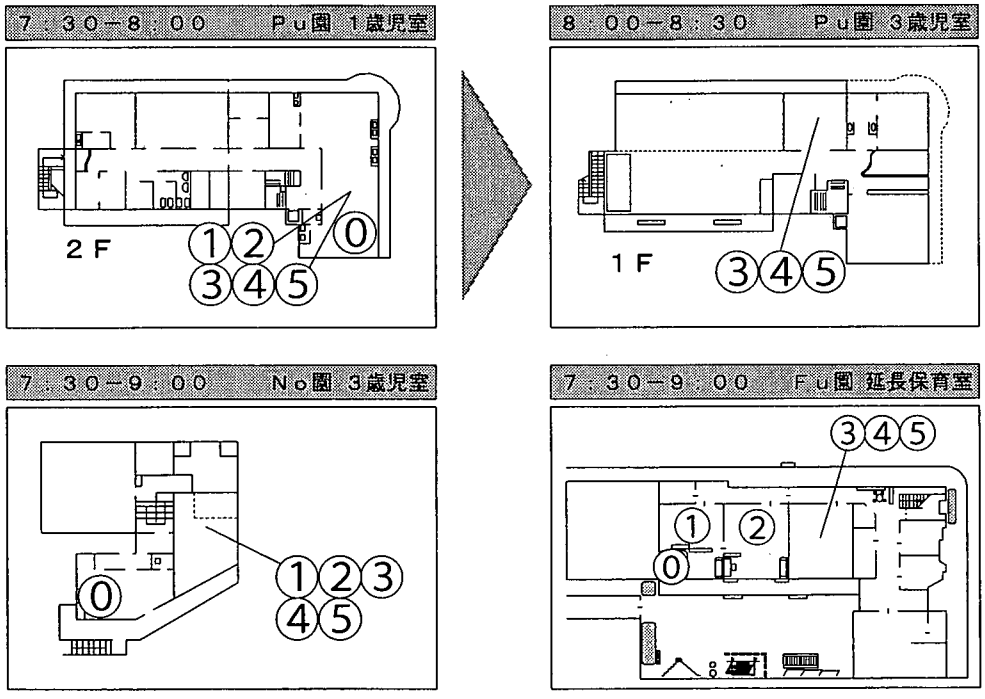



図４・５　早朝保育の活動場所

・**基本保育→午睡**

基本保育が終わると短時間児は降園し，長時間児は午睡へと入る．その際，長時間児が活動場所を移動する場合が多い．

①Ｐｕ園

降園する短時間児が数名程度のため，クラス室で帰りの会を行い，短時間児を見送り，長時間児はそのままクラス室で午睡をする．

②Ｎｏ園

クラス室で帰りの会を行い，中時間児と長時間児は短時間児に見送られ，延長保育時の活動場所であるホールへと移動する．そして，長時間児は午睡のため，３歳児室へ移動する．中時間児は長時間児が午睡の間ホールで自由遊びとなる．

③Ｆｕ園

クラス室で帰りの会を行い，長時間児は短時間児に見送られ，延長保育時の活動場所である延長保育室へ移動し午睡となる．

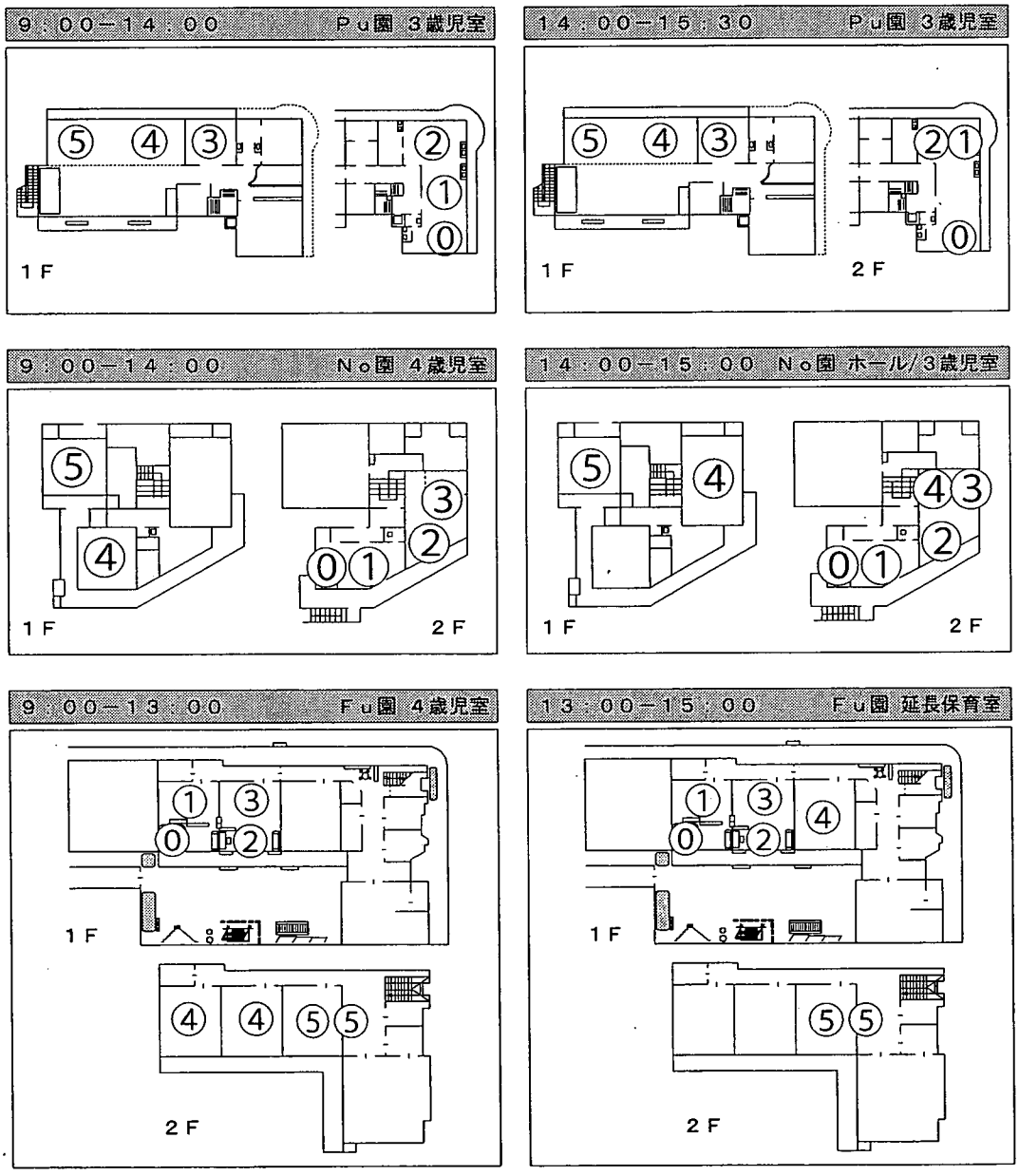



図４・６　基本保育・午睡の活動場所

**・午睡→夕方保育**

夕方には園児数の減少にともない，活動場所の集約を行う．まず幼稚園児を一室に集約し，補食の時間に幼稚園児を保育園部門へ移動させる．

①Ｐｕ園

午睡から目覚めた園児からおやつのためホールへ移動する．食べ終わった園児から園庭での外遊びとなり，１８時になると（調査時：５月）全員室内に入り，３－５歳児が４歳児で自由遊びとなる．

②Ｎｏ園

午睡から目覚めた長時間児がホールへ移動し，中時間児と合流する．また，５歳児の中時間児，長時間児もホールへ移動し，おやつの時間から４，５歳児がホールで合同保育となる．

③Ｆｕ園

４歳児が午睡から目覚めると，長時間児の５歳児が延長保育室へ移動し，おやつの時間から４，５歳児が延長保育室で合同保育となる．

その際，Ｐｕ園とＦｕ園はクラスと同規模の室で処遇するのに対し，Ｎｏ園はホールで処遇するためダイナミックな遊びを展開できる一方，最後は閑散とした印象となる．

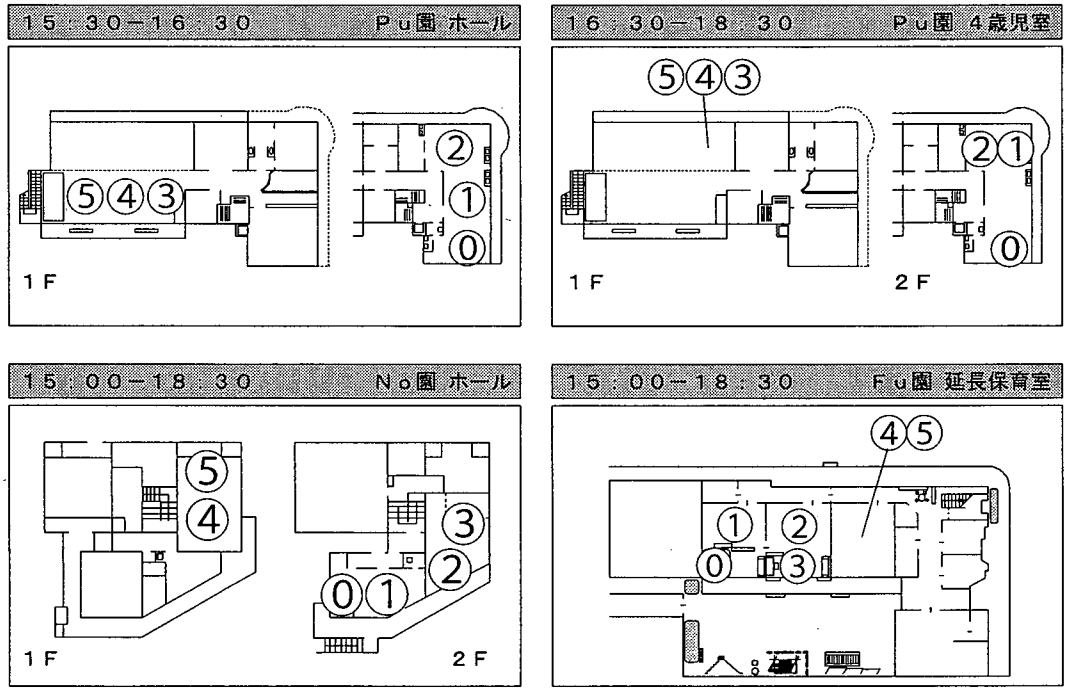



図４・７　夕方保育の活動場所

**・夕方保育→夜間保育（補食）**

補食の時間に幼稚園児を保育園部門へ移動させる．

①Ｐｕ園

１８時半に３－５歳児が保育園部門へ移動する．その際，補食を食べる場合は２歳児室へ，食べない場合は１歳児室で０－５歳児が合同保育となる．

②Ｎｏ園

１８時半に４，５歳児が保育園部門の２歳児室へ移動し補食を食べる．調査時（５月）は０－３歳児の利用は見られなかった．

③Ｆｕ園

１８時半に４，５歳児が保育園部門の２，３歳児室へ移動する．０－５歳児が同じ机で補食を食べる．

その際，園児数が少ないため，室の規模を小さくし，より家庭環境に近づけ，こどもがさみしくならないような配慮が必要となる．

## 2） 小括

幼保一体型施設では園児数増減に伴い，活動規模を一定の大きさに保つためや，保育者の人員配置への対応から，段階的に活動場所を移動することが多い．その際，移動回数が増えることで，こどもの活動の持続性が断たれないように配慮が必要である．

また，必要な移動回数や場所設定は，短時間児，中時間児，長時間児の設定方法によって異なるため，施設計画時に運営方法も見据えた空間設計が求められる．

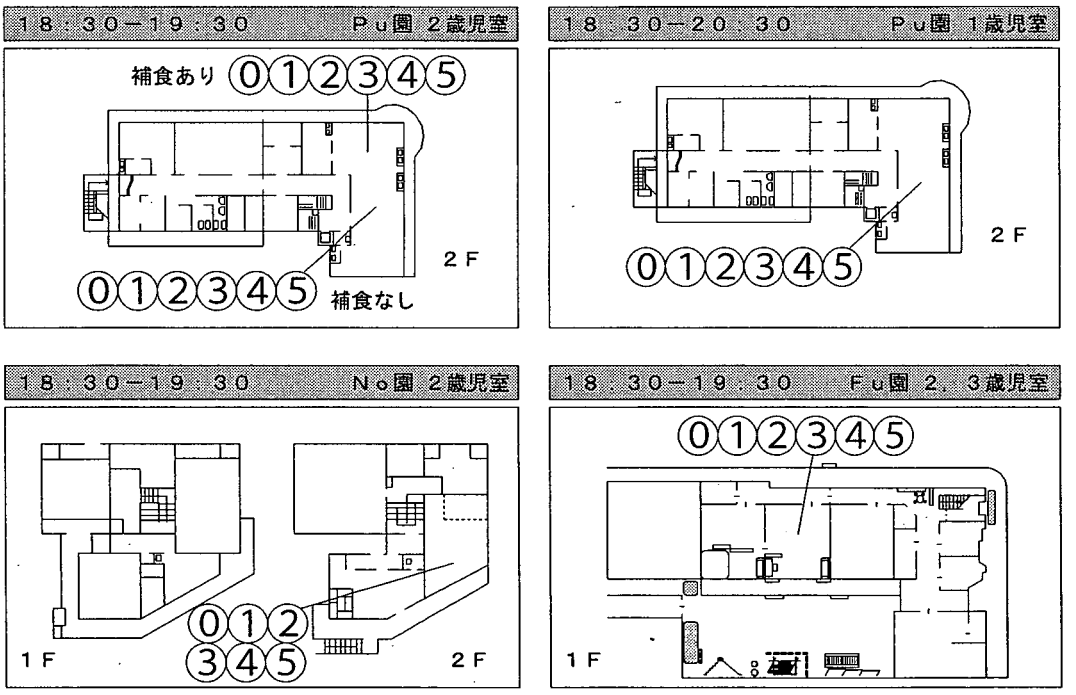



図４・８　夜間保育の活動場所

### D．2．2　延長保育時の活動場所

#### 1）延長保育室の有無による活動場所・移動回数の違い

延長保育室を設置しているＦｕ園では，基本保育後外遊び以外を延長保育室で過ごすため，移動回数は３回と最少で，安定した環境を保ちながら，時間帯に合わせたコーナー作りによって生活が単調になるのを防いでいる．

Ｎｏ園では短時間児の降園後，ホールで自由遊びに入る中時間児と，３歳児室で午睡をする長時間児を分離するため，Ｆｕ園より移動回数が１回増える．

Ｐｕ園は全員が長時間児のため，短時間児を見送りそのままクラス室で午睡となり，活動場所の移動は起こらない．一日クラス室で過ごすと単調になりがちであるが，Ｐｕ園の場合はクラス室の前にあるオープンスペース型ホールを活用することで生活にメリハリをつけている．昼食やおやつにそのホールを利用しているため，移動回数は８回と最多である．

#### 2）食寝分離の状況

日本の乳幼児施設で食寝分離を実施している事例は少ない．

そのような中，Ｐｕ園ではオープンスペース型ホールを活用して，食事はホールで，午睡はクラスで行っている．このため移動回数は増えるが，室を分離することによって各園児のペースが保障される．（食事の室と寝る室を分けることにより，午睡から目覚めたこどもからホールでおやつを食べ始め，食べ終わったこどもから遊びに行くことが可能となる．）

一方，おやつと午睡が同室のＦｕ園の場合は，午睡後，部屋を掃除してからおやつの準備をするため，その間こどもたちは室の隅で絵本などを読んで待つことになり，中途半端な遊びの時間が発生してしまう．また，全員がおやつを食べ終わってから遊びに移るので，個人のペースで生活することが難しくなる．

こどもにとっても衛生面からも，食寝分離が望ましい．

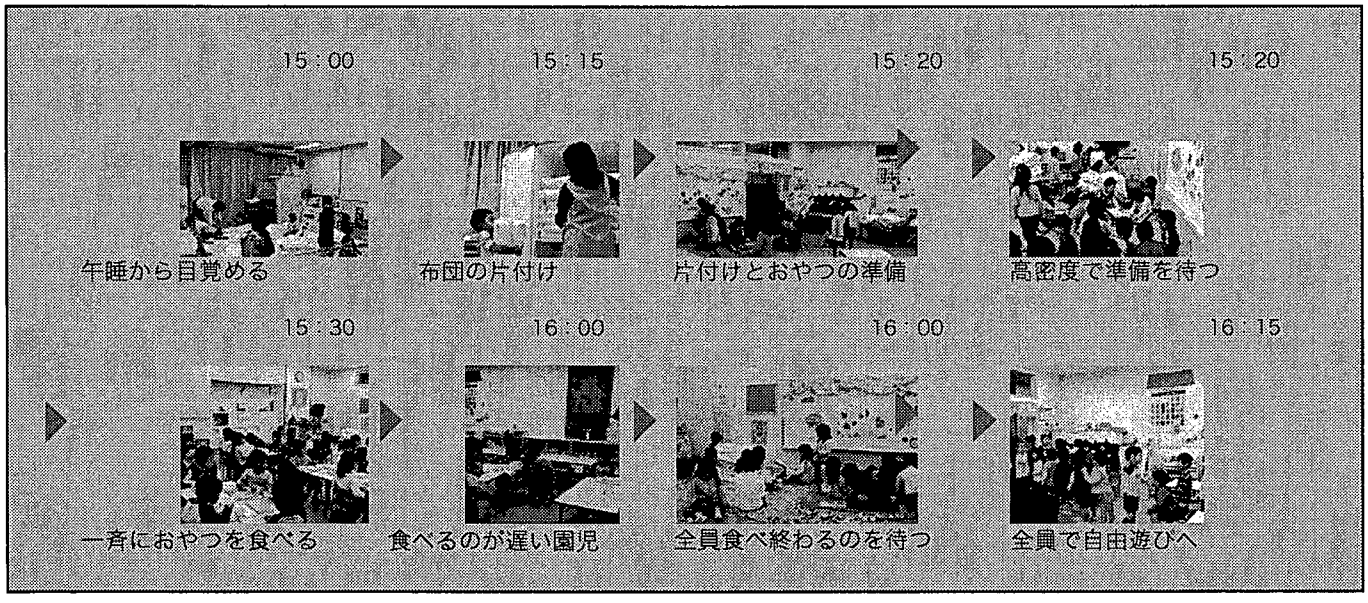



写真４・１　午睡・おやつ・夕方の自由遊びへのシーン変化（Ｆｕ園）

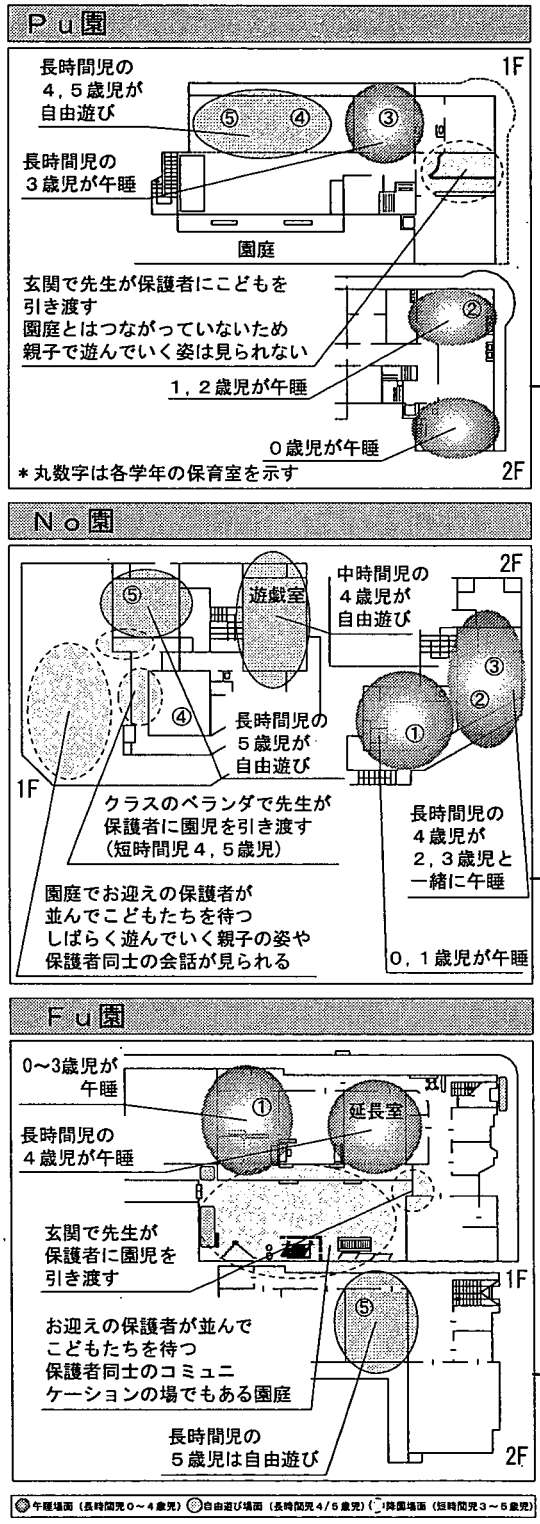
### D．2．3　短時間児と長時間児の分離場面

幼保一体型施設の一日の中で保育者が最も注意を払う場面の一つは，短時間児が降園し長時間児が午睡に移る場面である．

短時間児のお迎えの保護者へは，保育者や保護者同士のコミュニケーションの場の提供，同時に長時間児には落ち着いた室の提供が重要となる．

この場の保障には建築空間の有り様が強く影響している．

3園の特徴を以下に示す（図4・9）．




午睡の室は園庭や玄関から距離があり安定しているが，引渡し場所の玄関は園庭と接しておらず小規模な空間である．

午睡は2階の3歳児室で行うため安定した環境が保障される．短時間児は各クラスのベランダで保育者から一人ずつ保護者に引渡され，園庭で遊ぶ姿や保護者同士会話する場面が見られる．

午睡の室が園庭に面しているため，短時間児のお迎えの様子を遮断するためにカーテンを閉め，静かな音楽を流すなど工夫している．短時間児は玄関で保育者から保護者に一人ずつ引き渡され，園庭が保護者同士のコミュニケーションの場となっている．

図4・9　幼稚園児の降園の際の様子

## D．３　夏期休暇期間の活動場面の展開

幼保一体型施設の特徴のひとつとして，長期休暇期間中は，長時間児のみとなり全体の園児数が激減する．この場合，延長保育時と同様の理由から異年齢で合同保育を行う場合が多い．

調査事例のＦｕ園では，終日４，５歳児合同保育が実施され，ホールを拠点とした自由遊び・食事・午睡といった通常期間の延長保育の時間帯と同様の生活を送る（図４・１０）．

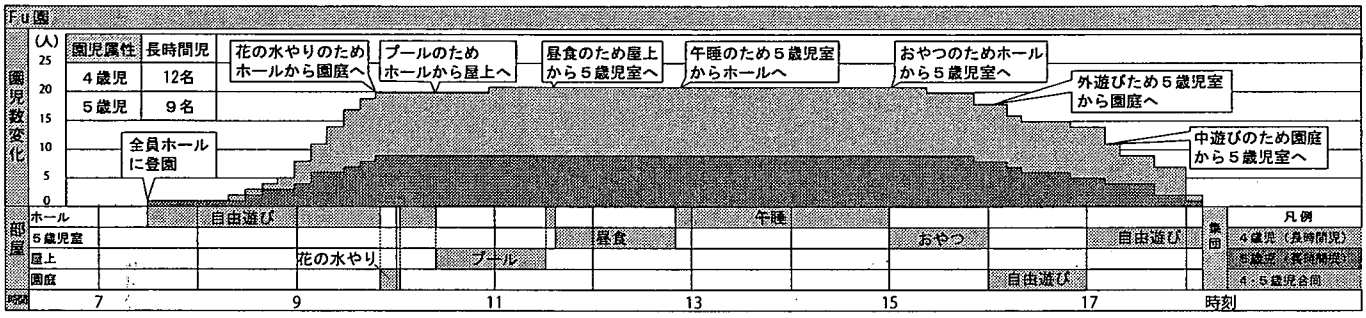



図４・１０　夏期休暇期間の活動展開　（Ｆｕ園　４，５歳児）

## E.　幼保一体型施設における園児のなじみの過程

### E．0　「なじみ」の定義

それまでの家庭中心の生活から幼稚園での生活が始まる場合，又はそれまでの保育所での生活から幼稚園での生活へ移行する場合，それぞれの園児にはドラスティックな環境移行がおこる．

時間の経過とともに園児に主体性が生まれ，空間やモノを使いこなす創造性，独自性の形成が徐々になされている．

このプロセスを「なじみ」の過程として，以下分析を行っていく．

### E．1　調査概要

調査⑤の終日個人追跡調査より，Ｆｕ園の４歳児クラスにおいて短期間児２名（短時間児１名，長時間児１名）と長期間児１名の計３名について，分析を行う．

### E．2　なじみの分析要素

こどもの主体的な活動を最もよく観察されると思われる「自由遊びの時間帯」における各園児の行動からなじみについて分析を行う．

まず，[短期間・長時間児]を事例として，以下の３つの観点から個人のなじみの過程について考察する．

図５・１，５・２に４月，５月，１１月の一日の活動様態を示す．

#### 1）空間的要素

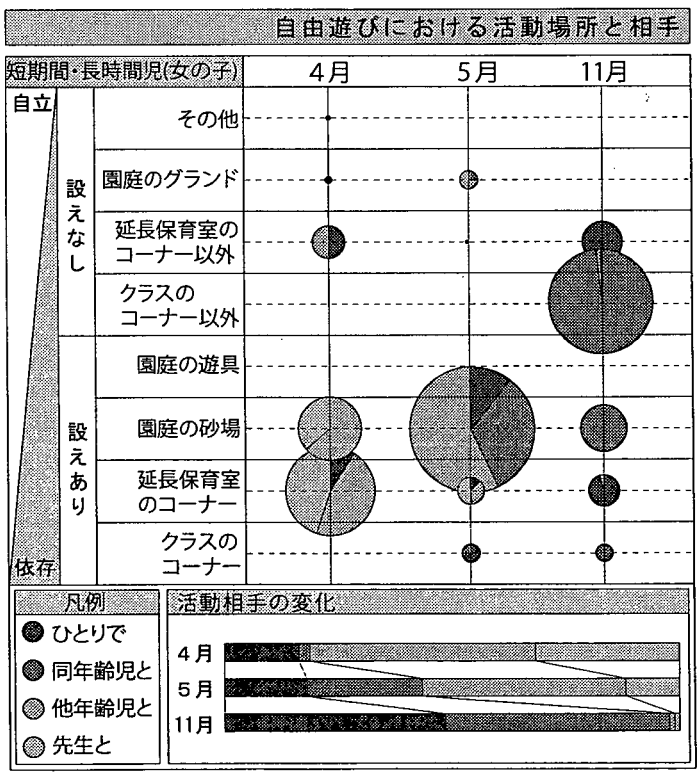
４月は，保育者がいる場所に終始滞在し，５月は砂場の端や室内では保育者が設定したコーナーの中で遊ぶ．１１月になると，同じ砂遊びでもお気に入りの砂を見つけその砂がある滑り台の下で遊びを展開する．室内ではブロックなどの道具を用いて室の隅に自分の居場所を形成し，その中でじっくり遊ぶようになる．

#### 2）物理的要素

外遊びでは，４月は砂場の砂をコップなどにただ詰めるだけだったが，５月になると同じ砂場でも色々な種類の道具を使って友だちとおままごとをするようになった．室内遊びでは，１１月に，設定されたコーナーにとらわれず，椅子を机代わりにして座面でお絵かきをする場面も見られた．

#### 3）人的要素

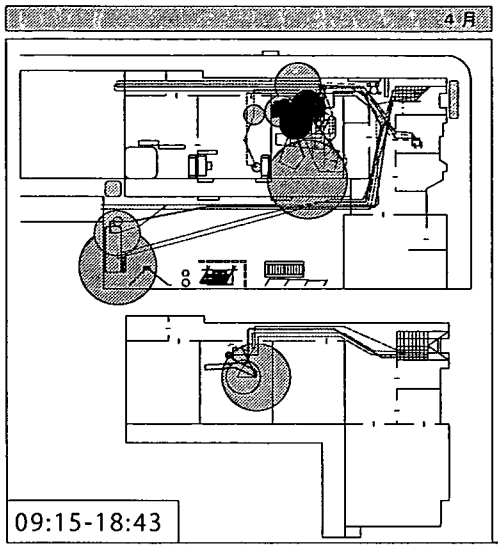
４月は保育者と過ごす時間が全体の約３割を占め，かつ５歳児に遊んでもらう場面がほとんどだったが，



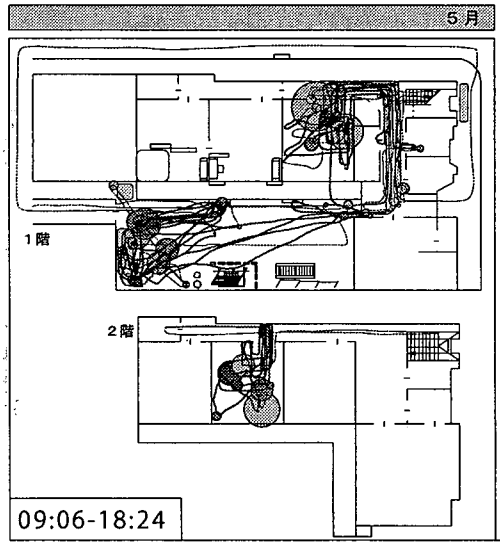

円の大きさはその場所の滞在時間を示す

図５・２　自由遊びにおける活動場所と相手の変化（短期間・長時間児）

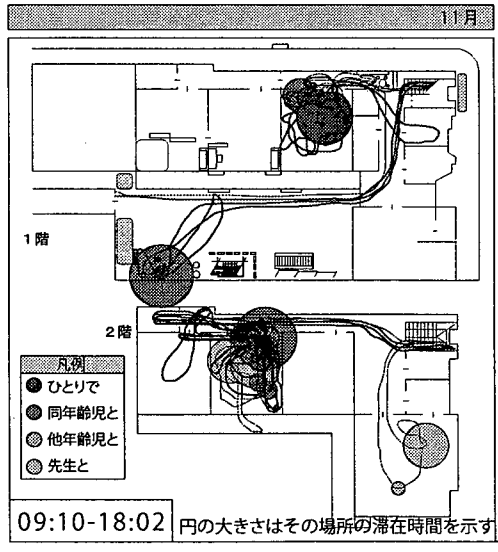
5月には基本保育時間帯は同年齢児と遊ぶようになり，11月には保育者から自立し，ひとりや同年齢児と遊ぶ時間が大半を占めている．入園当初，延長保育時に5歳児に遊んでもらえたことが，園の生活に早くなじみむきっかけを与えており，幼保一体型施設の利点が現れている．




泣きながら登園。
ずっと先生にくっついて手をつないだままで、午前中の自由遊びの間も、先生のあとについて回る。ずっと一ヶ所にとどまり自分の意思で遊べていない。突然泣き出すこともしばしばあり、給食の時間はずっと先生のひざの上で食事。先生が少しでも離れると泣き出すので、午睡の時も抱っこされたまま就寝。おやつも先生のひざの上。夕方5歳児と合同自由遊びの時は、5歳児のお姉さんたちに遊んでもらう。
遊び場は、自分が遊びたい場所ではなく、先生やお姉さんたちがいるところを選択している。
泣いた回数（8回）




朝母親とクラス室の中まで一緒に登園し、お支度を手伝ってもらう。母親が帰ろうとすると泣き出し、先生に抱っこされてお別れ。その後はすぐ泣き止み、仲良くなった男の子と一緒に行動し、歌も大きな声で歌う。午前中の園庭での自由遊びも道具や水を使って積極的に遊べるようになった。
しかし、短時間児と長時間児を分離する際は、長時間児と一緒に行動せず、一人先生と手をつないで後から午睡室へ行く。その後は一人でおとなしく就寝。布団も自分で片付ける。夕方の自由遊びの時は、5歳児のお姉さんたちにくっついて行って遊ぶ。
泣いた回数（3回）




ひとりでクラス室まで登園し、自分でお支度をする。午前中の室内遊びの際は、同年齢児と二人でブロックで自分たちの基地を作って、その中でお絵かきなどをして遊ぶ。
午後の外遊びの際は、お気に入りの砂がある滑り台の下で、同年齢児や一人でずっと砂遊びをする。夕方の延長保育の自由遊びでは、同年齢児と遊ぶことが多く、また一人でお絵かきや工作をして遊ぶ場面も見られる。
泣いた回数（0回）

**図5・1　園児の活動様態の変化　ーなじみの過程ー　（短期間・長時間児）**

## E．3　施設滞在期間の違いがもたらすなじみへの影響

[長期間・長時間児]と[短期間・短時間児]の園児について比較する．

図５・３，５・４に４月，５月，１１月の一日の活動様態を示す．

外遊びでは，長期間児は４月から園庭の端のお気に入りの場所で他の長期間児と虫取りなどをして遊んでいる．一方，短期間児は保育者がいる砂場で終始遊んでいる．

５月も同様な傾向が見られたが，１１月になると短期間児も自分で作った工作物を手に持って，園庭全体を走り回り，ダイナミックな遊びを展開するようになる．

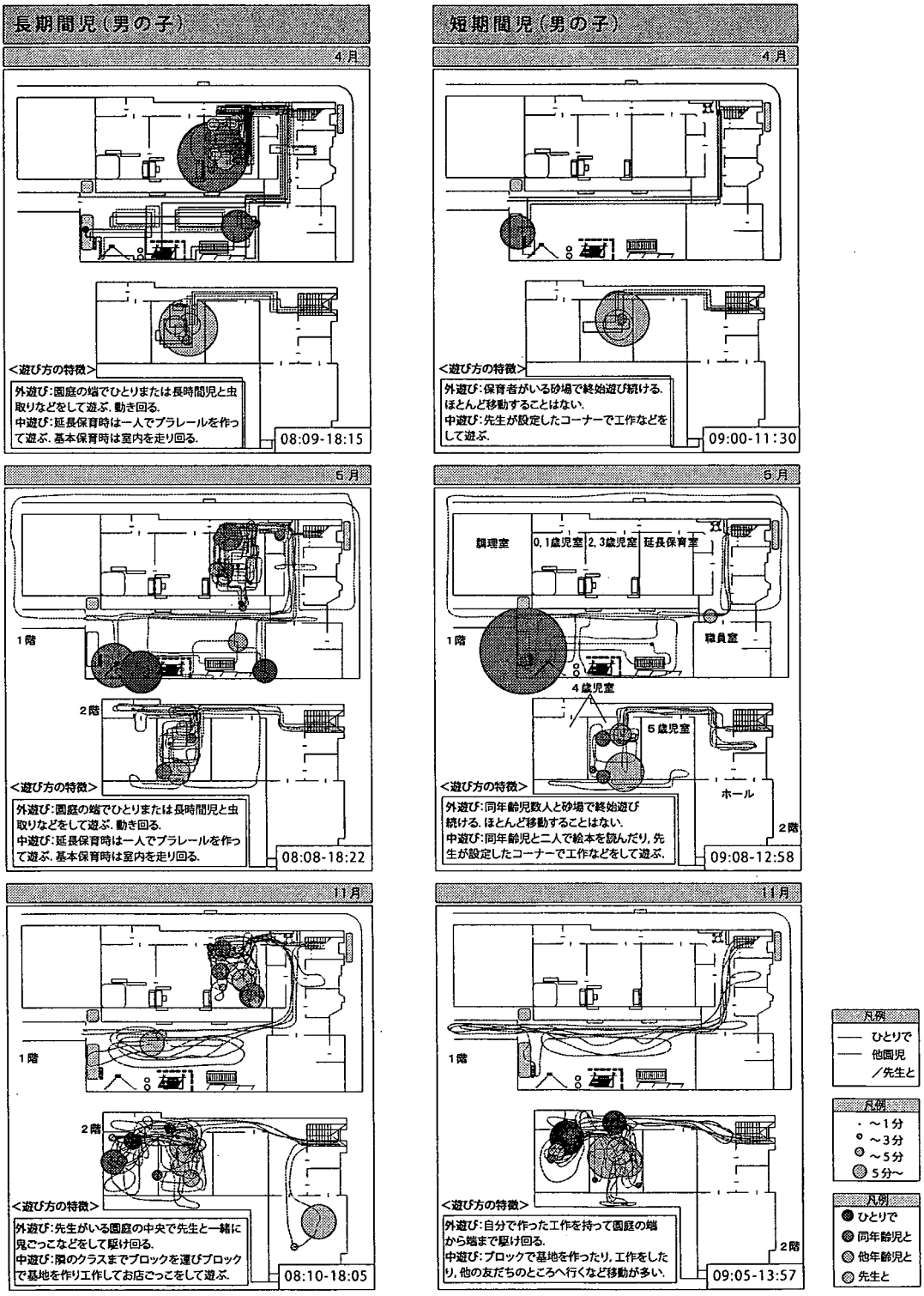



図５・３　園児の活動様態の変化　－なじみの過程－　（長期間児と短期間児の比較）